

第 63 回全附属高等学校部会教育研究大会報告

研究部 佐藤 健 太

1. はじめに

2022 年度の全附属高等学校部会研究大会は、「理科」、「保健体育」、「家庭科」、「生活指導」、「附属のあり方」、「図書」の 6 分科会が設けられ、10 月 14 日（金曜日）、15 日（土曜日）の 2 日間にわたって開催された。東京学芸大学附属高等学校が幹事校となり、新型コロナウイルス感染症対策によるオンラインでの開催となった。本校からは副校長と教員 6 名が参加した。

2. 実施概要

1. 日程 2022 年 10 月 14 日（金曜日）、15 日（土曜日）
2. 実施形態 オンライン開催（幹事校：東京学芸大学附属高等学校）
3. 時程

第 1 日 <10 月 14 日（金）>

9:30	10:00	10:30	12:30	13:30	15:30	16:00
入室	全体会	分科会 1	昼食	分科会 2	準備会	

第 2 日 <10 月 15 日（土）>

9:30	10:30	10:45	12:15	12:45
分科会 3	休憩	講演会	高校部会総会	

講演会の内容は以下の通りである。

テーマ：「大河ドラマの見方・教材化 — 「篤姫」を例に — 」

講演者：大石 学 氏（東京学芸大学名誉教授）

3. 発表概要

本校からは以下の 4 名が 4 件の報告を行った。概要については、次ページ以降の各発表者からの報告を参照されたい。

- 生活指導分科会

「特別活動の評価」

十 九 浦 美 里

- 理科分科会

「理科・数学・情報の融合型授業の実践」

山 本 夏 菜 子

- 保健体育科分科会

「ダンスの授業について」

丸 山 実 花

- 家庭科分科会

「科学的興味・関心を育むサステイナブルな教育実践」

葎 内 あ り さ

特別活動とその評価について

—特別活動年間計画表作成からみえること—

指導部 十九浦 美里

1. はじめに

今年度の1年生から、指導要録での特別活動についての評価が必要となる。改善通知では、特別活動の特質と学校の創意工夫を生かすことから設置者ではなく「各学校で評価の観点を定める」ともあり、指導要録、調査書にも記載が必要となる特別活動の観点や、評価を行ううえでの評価規準を決定することが急務である。全附連では、昨年度より生徒指導部を中心に検討している年間計画表や評価方法について報告を行った。

2. 発表概要

年間指導計画の作成と評価規準、評価の方法の決定に向けて、今年度の動きを中心に報告を行った。

2.1. これまで行ってきた特別活動の整理

評価項目である「ホームルーム活動」「自治会活動」「学校行事」への分類を行い、行事によっては（特に輝鏡祭）は、複数の項目にまたがるなど、教員間での共通理解を図った。

2.2. 評価体制

3クラスの学年担任制であり、ホームルーム行事も、学年全体で動かすことが多い。体育祭や文化祭の係活動は生徒も教員も全員が何かしらの役割、顧問を担っている。例年行っている生活会議などの生徒の様子の共有の場も活用しながら、学年担任が評価を行っていくことを検討している。

2.3. 本校の評価規準（観点）の紹介

- ・集団と個の関係について理解し、集団活動の意義や価値、それが社会の中で果たす役割や意義について理解している。（知識・技能）
- ・自分とは異なる考えや立場にある多様な他者を尊重し、認めあい支え合いながら、合意形成や意思決定をしている。（思考力・判断力・表現力）
- ・集団と自己の在り方を改善しようとし、自分らしい在り方、生き方について主体的に選択・実行しようとしている。（主体性）

さらにこの観点をもとにした生徒アンケート（振り返り）を作成し、年2回行うことにした。生徒の特別活動に対する意識づくりつなげたいと考えている。前期分のアンケート（振り返り）結果について紹介した。

3. おわりに

どの学校もまだ手探りの状況であるようで、意見交換するまでには至らなかった。今後も情報を共有しながら、特別活動とその評価の在り方について検討を進めたい。

理科・数学・情報の融合型授業の実践

—SSH 学校設定科目「課題研究基礎」における化学分野の学習—

理科（化学） 山本夏菜子

1. はじめに

本校では、SSH 学校設定教科「課題研究」を設置し、1 年必修科目として「課題研究基礎」（2 単位）という授業を実施している。この授業は、観察や実験、データの扱い等、探究活動に必要な科学的知識・技能を融合的・体験的に学習し、2 年必修科目「課題研究 I」につなげることを目的としており、数学・物理・化学・生物・情報の 5 名の教員が、1 年間を通して連携しながら授業を進めている。週に 1 回、2 時間連続で、1 学年全員を同じ授業時間に配置することで、学年全体での特別講義やプレゼンテーション、クラスごとのゆとりをもった実習・実験等、様々な形態での授業の実施が可能となっている。今回は、本授業における教科間の連携について化学分野を中心に概観するとともに、1 年「化学基礎」との連携について報告した。

2. 課題研究基礎における教科間の連携

この授業での講義中心の授業においては、1 つのテーマを軸に異なる分野の 3 名の教員が、当該分野の角度からテーマに関連した内容の授業を行う科目横断的授業を実施している。3 回（6 時間）で 1 テーマの内容が完結するようになっており、それぞれの授業の題材や知識・技能が、他の授業でも活用例や異なる視点からの説明があるように、授業内容の連携を図っている。現在この授業で取り扱っているテーマとして「数」、「グラフ」、「データ」の 3 つを設けている。

例えば、テーマ「数」では、化学基礎の序盤で登場する 10 のマイナス乗の計算や、pH の定義にも関わる log の取り扱いについて、数学科教員が化学での使用も視野に入れた授業を展開している。また、テーマ「グラフ」では情報科教員が Excel を用いたグラフ作成の際に、放射性同位体の半減期を題材として扱うなど、教科間で連携を図りながら授業を行っている。

3. 1 年「化学基礎」との連携

本校の理科では、第 1 学年に「化学基礎」、第 2 学年に「物理基礎」と「生物基礎」をそれぞれ 2 単位ずつ必修科目として配置している。そのため、第 1 学年においては、「化学基礎」と「課題研究基礎」の 2 つの授業で、同じ教員が担当している利点を生かし、連携を取りながら進めている。例えば、「酸と塩基」の単元では、基本的な知識や実験操作を化学基礎の授業で学習した上で、課題研究基礎の授業で、グループごとに 3 週にわたって中和滴定を用いた身のまわりの酸の定量実験を行うように授業スケジュールを調整している。

「課題研究基礎」ではその後、実験の成果をスライドにまとめ、グループごとに口頭発表も実施している。

4. おわりに

「課題研究基礎」の大きな利点の一つは、5 名の教員で担当することによって教科間での連携が取りやすくなることである。また、通常の授業だけでは時間的な制約によって実施が難しい探究的な活動を、「化学基礎」との連携によって実現している。一方、授業では分野間のつながりについてはあまり明確に言及しておらず、生徒一人一人が頭の中で学習したことを繋いでいくことを期待しているが、それがどの程度達成されているかについては、今後さらに検証および検討していく必要がある。

ダンスの授業について

—「現代的なリズムのダンス」 オリジナルのダンスを生成する道筋—

保健体育科 丸山実花

1. はじめに

ダンスの授業では、模倣と創造のバランスが大切だと考える。現代的なリズムのダンスで自由に踊ることを、もう一步創造側に踏み込み、オリジナルにしていく過程を考えた。

2. 授業内容

表1 基本形となるリズム

ヒップホップのリズムを3時間行った。なるべくシンプルかつ誰でもできる「足じゃんけん」と「ケンパー」の組み合わせを用いた(表1)。これを軸にして、要素を足していった(表2)。条件付きで要素を足してすぐ実践することを何度か繰り返し、それらの要素を含めて5分程度考えて創作、発表、という流れで行った。2~3人組を基本として、各時間とも異なる人とその都度オリジナルを創作した。	1	2	3	4	5	6	7	8
	チョキ	ケン	チョキ	ケン	チョキ	ケン	チョキケン	チョキケン
	パー	ケン	パー	ケン	パー	ケンケン	パー	ー

最初の要素として「パーケンでまわる」という条件を出すと、1人ずつがその場で素早く回る、を採用するところが多かった。『まわるって何? 何軸に対して? 速さは?』と問いかけていったところ、メリーゴーランドのように回る、ヨーヨーのように回る、太陽と惑星のようにして回る…と多様な位置での「まわる」がみられた。最後のポーズの部分で素早く回る、8カウント(16カウント)を目いっぱい使ってゆったりと回る…と速さやタイミングを変えたりしていた。

最初の要素として「パーケンでまわる」という条件を出すと、1人ずつがその場で素早く回る、を採用するところが多かった。『まわるって何? 何軸に対して? 速さは?』と問いかけていったところ、メリーゴーランドのように回る、ヨーヨーのように回る、太陽と惑星のようにして回る…と多様な位置での「まわる」がみられた。最後のポーズの部分で素早く回る、8カウント(16カウント)を目いっぱい使ってゆったりと回る…と速さやタイミングを変えたりしていた。

表2 足していく要素

1時間目	2時間目	3時間目
まわる CLAP	位置・向きをかえる リズムを帯で変える	違うことをする (待つ・合わせない) リズムを変える

CLAPは「ケンで入れる」という条件にすると、胸の前で1回ずつか、友達とタッチをする姿がみられた。『体のどの位置で叩く?』と問うと膝の下や背中と様々なところがみられた。『回数も0~任意の数で』と条件を加えると、「叩けるだけ叩こう」もあれば「3回って面白い」とリズムを味わうペアもみられた。

生徒は要素を足してダンスを壊していく過程を経験することで、リズムにのりながら自分たちのオリジナルのダンスにしていくことを味わっていた。これらにテーマ性を持たせることも可能であり、創作ダンスとのつながりも意識できると考えた。しかし実際はうまくいかず、「リズムにのらなければならないリズムダンス」と「そうでなくてもよい創作ダンス」となってしまった。教員の提示の工夫が必要だと感じた。

3. まとめと課題

また、要素を足す過程では、教員からの問いかけが必要であった。より多様なオリジナルのダンスを創造するためには、動きの幅の枠を取り払い、生徒の動きを引き出すための問いかけが重要であると考えられる。

生徒は要素を足してダンスを壊していく過程を経験することで、リズムにのりながら自分たちのオリジナルのダンスにしていくことを味わっていた。これらにテーマ性を持たせることも可能であり、創作ダンスとのつながりも意識できると考えた。しかし実際はうまくいかず、「リズムにのらなければならないリズムダンス」と「そうでなくてもよい創作ダンス」となってしまった。教員の提示の工夫が必要だと感じた。

参考文献

全国ダンス・表現運動授業研究会(編),(2021)『改訂版 明日からトライ!ダンスの授業』東京:大修館書店。

科学的興味・関心を育むサステイナブルな教育実践

—家庭科における STEAMS 教育—

家庭科 葭内 ありさ

1. はじめに

2022年度の全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会家庭科部会にて、「科学的興味・関心を育むサステイナブルな教育実践—家庭科における STEAMS 教育—」のタイトルで、研究発表を行なった。本校の家庭科およびSSH（スーパーサイエンスハイスクール）概要を紹介し、SSH学校設定科目1年家庭科必修「生活の科学」における実践を取り上げた。

2. 概要

本校は、必修家庭科4単位を置いている。2019年度より、文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されており、本会では、本校の家庭科の概要を紹介しながら、SSHにおける家庭科科目の概要を、実践例も交えて取り上げた。家庭科では、SSH学校設定科目として、1年生に必修「生活の科学」（1単位）を設置している。「生活の科学」は、身近な生活に関する事柄を題材とすることで、科学への興味・関心を育むことを目的としている。高等学校家庭科必修「家庭総合」学習指導要領では、「生活を主体的に営むために必要な科学的な理解を図るとともに、それらに係る技能を 体験的・総合的に身に付けるようにする。」とあり、科学的な教育を行うことが示されており、本校では従来必修「家庭総合」で科学的な内容を扱ってきた。さらに、「生活の科学」では、科学的な視点をより深めた実践を行なっている。

「生活の科学」は、特徴として、科学的な興味・関心の育成に加えて、一貫してエシカル・サステイナブルな視点を大切にしている。手法として、外部連携、1年生必修の「家庭総合」（1単位）との教科内連携、他教科との連携や高大連携などを活かし、体験を交えた実践を年間を通して実施している。家庭科、SSHおよび「生活の科学」概要の説明の後に、STEAMS教育を意識した家庭科教育のあり方を検討した実践例を紹介した。なお、STEAMS教育とは、一般的なSTEAM教育に、本校の提案する、サステイナブルのSを最後に加えたものである。特に具体的に紹介した実践は、2021年11月6日に日本教育実践学会第24回研究大会で発表し、日本家庭科教育学会誌に掲載済みであり、詳細は以下の参考文献を参照されたい。

3. おわりに

参加各校の研究発表や質疑応答も行われ、新たな知見を得て、有益な研究交流の機会となった。幹事校の東京学芸大学附属高等学校をはじめ、ご参加の各校の先生方に感謝申し上げます。

参考文献

葭内ありさ（2022）スーパーサイエンスハイスクールの家庭科における STEAM 教育—でんぶんの糊化から見つめるミクロな世界—、『家庭科教育学会誌』65（1）：33-38.